

第48回 例会報告

2003年6月28日(土)に、本会の第48回例会が筑波大学学校教育部に于行われた。例会で行われた大倉泰裕氏と花井(福士)和代氏の講演の要旨は、以下の通りである。

平成13年度中学校教育課程実施状況調査について

大 倉 泰 裕*

教育課程実施状況調査(以下調査という)とは平成元年に告示された学習指導要領に基づく教育課程(現在から見ると旧課程にあたる、現行の課程の調査については平成16年1・2月に実施予定)に実施状況について、学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習の実現状況の把握を通して調査研究を行い、指導上の問題点などを明らかにして、今後の学校における教科の指導の改善に資することを目的としている。またペーパーテストで行うことが適当なものについてのみ行っている。結果の詳細については、報告書が市販されているのでぜひご覧いただきたい。

さて、この種の調査を取り扱うに際しては注意すべき点がいくつかある。この調査の場合、学習指導要領の実現状況について、具体的な個々の調査問題ではなく、学習指導要領の内容や項目ごとに実現状況をとらえ、今後の学習指導に生かしていくことが目的である。たとえば公民的視野では、国際経済に関する問題など生徒の日常生活と結びつきにくい問題が設定通過率を下回る傾向が見られるので、今後この項目を扱うときには指導を工夫するなどの配慮が求められる、というようなことである。したがってそれ以上の、たとえば特定の学校や個人人の学力などについて問うことを目的として実施している調査ではないのだから、変な対抗意識をあおるような使い方をするものであってはならない。

この調査では学習に対する生徒の意識や、教師の指導などについても調査しており、それらのデータとの関連性を調べることにより、今後どのようなことに留意しながら指導を行えばよいのかが見えてくる。たとえば、「課題解決的な学習を取り入れた授業を行っているか」という質問に対して肯定的な回答をした教師の指導を受けている生徒の解答の通過率は、否定的な回答した教師の指導を受けている生徒の解答の通過率よりも高くなる傾向が見られることから、このことから今後は授業においては、課題解決的な学習を取り入れていくことを検討しなければならないといえる。また生徒の生活習慣と生徒の解答の通過率を調べてみると、朝きちんと朝食をとってくる生徒の解答のほうが高くなるという結果があらわれている。このことから学級担任として生徒や保護者と面談する際の指導の根拠として活用することなどが考えられる。

世間ではこの調査は一般に「学力調査」とよばれているようだが、この調査で問うてる学力とは学習指導要領で求めている学力であり、一部世間でいわれているような狭い範囲の学力(すなわち知識・理解)ではない。そのことが問題に反映するように、問題作成に際してもいろいろ工夫がされている。さらに4観点についても十分配慮しながら問題を作成しており、学校現場にお

いても考查問題の作成の際には参考にしてもらえればと思う。

なお、最後に大学院生に対して教員になるにあたっての心構えについても話をしたが、紙面の都合上これに関連する部分は割愛させていただく。

注： 設定通過率とは、学習指導要領に示された内容について、標準的な時間をかけ学習指導要領作成時に想定された学習活動が行われた場合に、個々の問題ごとの正答、準正答の割合の合計である通過率がどの程度になると考えられるかを示した数値である。

教育現場

—理想と現実—

華井(福士) 和代*

どうやって世界史を教えるべきか。はじめて教壇に立って以来5年、今もこれが私の最大のテーマである。系統学習、問題解決学習などいろいろな方法があるが、どうしたら、生徒にリアルな世界史像を描かせ、一人の人間の一生を超えた歴史的視野を持たせることができるのか。例会では、私の個人的な体験から、世界史教育の模索と実践の一例を報告させていただいた。

おそらく多くの筑波生がそうであるように、私自身が高校で受けた世界史は、知識を網羅的に扱う授業であり、「ひたすら覚える」世界史であった。そのため、筑波大付属中学校での教育実習で初めて体験した、生徒に本質的な発問を投げかけ、問題を考察していく過程で世界史の個々の事象を考察していくという、「考える」授業には驚き、感動した。教育研究科での2年間には、「学び方を学ぶ」「参加型」の授業の大切さを学び、生徒が自分で歴史に対して働きかけられるような授業を展開したいと考えていた。おかげで、筑波大学付属坂戸高等学校での非常勤講師時代には、授業に何か「ネタ」を持って行って謎かけをしたり、ディベートや調べ学習を行ったりして、生徒が参加できる授業の工夫をした。自分なりの「世界史の教え方」が確立したと自負していた。

しかし、成城学園高校へ着任して私の世界史教育観は大きく変わった。本校の世界史教育は2～3年生での必修5単位が基本であり、限られた時間の中で、時代と地域を限定して教えている。2年生では古代史と近代史を、3年生では現代史を扱う。授業形態は講義一辺倒であり、大量の板書を写させるため、2年生の最初のうちは「書き過ぎだ」と生徒が悲鳴を上げるほどである。

着任当初は、本校の世界史教育の方針や生徒の状況に対して強い戸惑いを感じた。講義一辺倒のやり方は正しくないと感じてきたにもかかわらず、ひたすら講義をしなくてはならないということに疑問を感じ、「書き過ぎ」「受験校でもないのに内容が多過ぎる」といった抗議を受けながら詳細にわたる世界史を教えることにも疑問を感じた。

しかし、2年、3年と生徒の成長を見てきて、最近ではこの方針の効果が感じられるようになってきた。2年生では細事にわたる講義を聞いてノートを取るという授業を容赦なく進めていくため、2年生が終わる頃には、聞く力と書く力がついてきて、板書のほかにも話を聞いて書き込みができるようになる。3年生になると、事象の羅列ではなく、個々の事象のつながりを理解させるために、「なぜそうなったのか」という原因追求の視点を重視し、定期テストでも「なぜ」を

*成城学園高等学校

徹底的に問う問題を出す。そのため、「なぜ」という追求力が強くなり、なかには授業の範疇を超えて本質的な問題を知りたがり、通り一遍の解説では納得しない生徒が出てくる。定期テストの結果が成城大への推薦に直結していることもあり、テスト直前には3年生の質問が殺到し、休み時間や放課後に質問行列ができるほどである。世界史を深く追求しようとする生徒を見るととてもうれしくなると同時に、自分の高校時代を振り返って、彼らをうらやましいと思うこともある。

以前の私は「なぜそうなったのか」という疑問を生徒に投げかけて考えさせる授業をめざしてきた。しかし、本校での世界史教育のように、「なぜそうなったのか」を教師が講義で読み解いてみせる授業というのも、同じ効果があるのではないか。

学校・生徒・教師の個性によって、適する授業形態は多種多様だろう。これまでの経験を踏まえて、私の生徒たちと私に最適な世界史教育のあり方をさらに模索していきたいと思っている。